

## 24 護王神社と国体記念碑

写真の赤い屋根の小祠は、粟井郷鳴地内「郷の池」への入口の道脇に鎮座する和気清麻呂を祭神とする護王神社です。

和気清麻呂は、天平5年(733)、備前国藤野郡(岡山県和気町)の生まれ。神護慶雲3年(769)、弓削道鏡が天皇の地位を狙ったとき、そのたくらみを阻んだ宇佐八幡神託事件で知られる人物です。この功績により嘉永4年(1851)、孝明天皇から護王大明神の神号が贈られました。



郷鳴の護王神社

では、この神様がどんな因縁で郷鳴の地に祀られることになったのでしょうか。

答えは、この神が誕生した江戸時代末から明治維新(王政復古)、そして第二次世界大戦終結時まで続いた日本人の精神思想を考えれば自ずと出るように思えます。

和気清麻呂は、戦前の日本人なら誰でもが知っていたと言われます。史上、数多くの偉人の中で、皇居周辺に銅像が建つのはわずかに二人。どちらも天皇家に功績のあった人物で、

和気清麻呂はそのうちの一人です。つまり、「当時」の日本社会からすればどこに祀られていてもおかしくない神様でした…。しかし、このお宮の両脇に据えられた瓦竈の多さはいったいどういうことなのか知りたいものです。



護王神社の瓦竈。金属製のものも

右下は、郷鳴地区から谷二つ東4.

4km隔つ日近宇杉谷地内の山裾、太師堂跡にある倒壊した石碑です。よく見てください、国體記念碑と刻んであるのがわかりますか。今日、国体と言えば国民体育大会以外に思いつかないのですが、どうやらそうではなさそうです。この国体の意味は、簡単に言えば神様である天皇を中心とした政治の仕組みということでしょう。この石碑がどういうタイミングで建てられたものかわかりません。

しかし、郷鳴の護王神社と同様、これまた当時の日本国内の世情からすればどこにあっても格別不思議なものではなかったでしょう。

という次第で、これらはそれぞれの地と格別に因縁があったものではなく、当時の人々の、お国を思う心が形となって出たものでしょう。

二つのものは形は違いますが皇国史観という共通項で結び付く精神的歴史遺産ということができそうです。そしてこれらは、生活環境の厳しい山あいの集落で暮らす人々の互いの絆を強める一つの拠り所となったに違いありません。



杉谷大師堂脇の國體記念碑



## 和氣清麻呂公といのしし（京都の護王神社 HP から）

奈良時代・称徳天皇の御代。弓削道鏡という僧が法王となり、やがては天皇の位も奪おうと考え「『道鏡を天皇にすれば天下は平和に治まる』と宇佐八幡よりご神託があった」と天皇に言います。

天皇は、和氣清麻呂公を呼び、宇佐八幡へ行って神託の真偽を確かめてくるよう命じました。清麻呂公は宇佐へおもむき真意を問うたところ、宇佐の大神が現れ「天皇の後継者には必ず皇族のものを立てなさい。道鏡のような無道の者は追放しなさい。」とご神託を下されました。

清麻呂公は都へ戻り、このことを天皇に報告しました。道鏡は激しく怒り、清麻呂公の足の臑を切った上、大隅国（鹿児島県）への流罪とし、さらには、大隅国へ向かう清麻呂公に刺客を放ちました。



和氣町藤野 和氣神社の狛犬

足の臑を切られ、立つことすらできなくなった清麻呂公ですが、皇室を守った大神に感謝するため、宇佐八幡へ立ち寄ることになりました。そして、一行が豊前国（福岡県東部）に至ると、どこからか三百頭ものいのししが現れました。いのししたちは清麻呂公の輿の周りを囲み、道鏡の刺客たちから守りながら、十里の道のりを案内してくれたのです。清麻呂公が宇佐八幡での参拝を終えると、いのししたちはどこかへ去っていきました。不思議なことに、清麻呂公の足の痛みは治り、再び歩けるようになっていました。一年後、称徳天皇の崩御によって、道鏡は関東へ左遷されます。都へ呼び戻された清麻呂公は、時の天皇の信頼を得て活躍し、晩年まで世のため人のために尽くしました。清麻呂公を守ったいのししのお話は、後世まで語り継がれることとなり、清麻呂公を祀る護王神社には、狛犬の代わりに狛イノシシが建てられ、今も清麻呂公を護り続けています。